

加藤清正の実像

文禄2年(1593)3月、日本軍の諸将は漢城(現在のソウル)に集まり、今後の方針について協議します。そして秀吉の指示のもと、前線を朝鮮中央部の尚州^{サンジュ}まで撤退させ、尚州以南の主要拠点に諸将を再配置、朝鮮南部の領土確保と軍勢の立て直しを図ります。

〈15〉「地震加藤」の真相

新たな布陣により清正軍7,000人は、尚州への在陣とそこの城郭普請を命じられていましたが、ほどなく朝鮮半島南岸に近い晋州城攻略のため、6月から晋州に転戦しています。しかし一方では、戦局の転換に伴い、小西行長らを中心として明国との終戦工作が水面下で進められることとなります。

晋州城陥落後、秀吉は朝鮮半島南半分の実効支配を目指し、各拠点でいわゆる「倭城」と呼ばれる日本型城塞の構築と領内統治を命じ、しばらく膠着状態が続きます。清正は釜山浦^{プサンポ}から30kmほど北の西生浦と呼ばれる地域に在番を命じられ、そこに西生浦城を築きます。以後、清正はここを拠点として活動をおこない、臨戦態勢を維持しつつも、独自の講和交渉を模索していました。

さて、先述しました小西行長による明国との講和交渉が文禄5年に大詰めを迎えようとしていました。粘り強い交渉の結果、明国の勅使一行が講和のため日本に渡海して秀吉に面会する手筈が整い、講和は目前に迫っていました。この時、清正に人生最大の試練が訪れたと言われています。いわゆる「地震加藤」と呼ばれる、主君に忠義を尽くす家臣のお手本として、戦前の教科書にも登場する清正を語る際には必ず引用される逸話です。

一般的な「地震加藤」の話は次のようなものです。講和交渉を進める行長や石田三成が、それを妨害する清正を秀吉に訴え、秀吉の怒りを買った清正は、日本に呼び戻されて謹慎と切腹を命じられます。そこに京都・伏見で大地震が起き、主君・秀吉の身を案じた清正は、誰よりも早く伏見城の秀吉のもとに駆け付け、秀吉を大いに喜ばせて、晴れて許されたというものです。この話は、清正死後もなく編纂された清正の伝記「清正記」にも登場するため、あたかも事実のように語られていますが、真相は少し違うようです。

まず、清正が日本に呼び戻された理由については、従来朝鮮における清正の横暴な振る舞いを行長が秀吉に訴えたことが原因だとされていますが、実は秀吉と行長が進めていた明国との講和交渉に関係しているようです。講和交渉の譲歩策として、日本側は文禄4年から拠点以外の倭城を破却するなど、秀吉の指示のも



▲「錦絵 伏見大地震之図」熊本博物館所蔵
画面中央が加藤清正

と段階的な軍縮に取り組んでいる状況でした。清正の帰国は、軍縮を象徴する出来事として講和締結に向けた秀吉の政治的パフォーマンスであったと同時に、明国の勅使一行を伏見で迎え入れるための要員としてわざわざ上方へ召還されたものと思われます。実際に清正は、文禄5年5月に朝鮮から対馬へ渡り、まもなく上方へ入っています。そのような中、閏7月13日午前2時頃、京都・伏見を中心とするマグニチュード7.0(推定)の慶長伏見大地震と呼ばれる地震が発生し、完成間もない伏見城が倒壊するなど、上方を中心に大きな被害をもたらしました。清正がこの歴史的な大地震に遭遇していたことは事実で、地震発生2日後の閏7月15日に清正は、熊本にいる家臣に書状を出しています。その中で清正は「上方で大地震が起きて、伏見城の中はことごとく揺れた。しかし、秀吉様をはじめ、こちらにいる方々は皆無事である。また我々も無事である。京都や大坂の屋敷は頑丈で倒壊しなかった。伏見には我々の屋敷がないため幸運だった。」と伝えています。この内容から清正は、秀吉の安否を気遣ってはいますが、「伏見には屋敷を持っていない」と言っていますので、地震が発生した13日深夜には伏見にいなかったと考えるのが自然で、地震発生後真っ先に伏見城の秀吉のもとへ駆けつけたとは考えにくいです。仮に秀吉に面会したとしても、早くても翌朝のことだったと思われます。

当時の史料や状況を考えると、この「地震加藤」の出来過ぎたエピソードは、後世に脚色された清正伝説の一つと言えるでしょう。結果的に明国との講和は決裂して朝鮮への再出兵が開始され、清正は一旦熊本に戻った後、慶長2年(1597)正月に再び朝鮮へ渡ります。

生誕450年記念展「加藤清正」

期間／7月20日(金)～9月2日(日) 場所／県立美術館(本館)
詳しくは県立美術館(☎096-352-2111)へ